

王子たちは、兵隊が暗がりでもごまごしている間に「さあ、走れ走れ」と言いながら、ふたたび王女の手をとって、おいそぎで、かけ出しました。ナガナガは王子たちが、いいかげん遠くまでにげのびたのを見てひょいとぼうしをはずして、頭にかぶりしました。そしてひと足で一里またげる、その長い足で、ヒョイヒョイヒョイと、またたく間に王子のそばへ追いつきました。それからみんなは、またいっしょに走り続けました。そのうちに向こうの方に、王子のごてんのある町が見え出しました。王子は、「どうだ、兵隊はもう引き返したか。ちょっと見てくれ。」と火の目小ぞうに言いました。火の目小ぞうは、また後ろをふりかえって「おや、すぐそばに、すなけむりが見えます。これはたいへんだ。」とあわてました。すると、ブクブクが、「じゃあ、みなさんは、かまわずおにげ下さい。わたしがここに残って、ちゃんとしますから。」と、王子たちを先ににがしました。ブクブクはそのあと一人で立ちはだかったまま、ブク・ブク・ブク・ブクと、見る見るうちに大きな大きな大山のようにふくれ上がりました。そしてその大きな口をぱくりとあいて、「さあこい。」と言いながら、ゆうゆうとまちかまえていました。兵隊たちは、「ウワー、ウワー。」と、とき声を上げて、死にものぐるいでかけつけて来ました。みんなは、もうこうなれば、たとえ火の中をくぐっても王女さまを取りかえしてみせる、もし相手が王女をわたさないと言うなら、すぐに町をせめかこんで、町中のものを一人も残さず切り殺してやろうと、こうはらを決めているのです。間もなく兵隊たちはブクブクの口のまん前までかけて来ました。するとみんなは火の子のよ